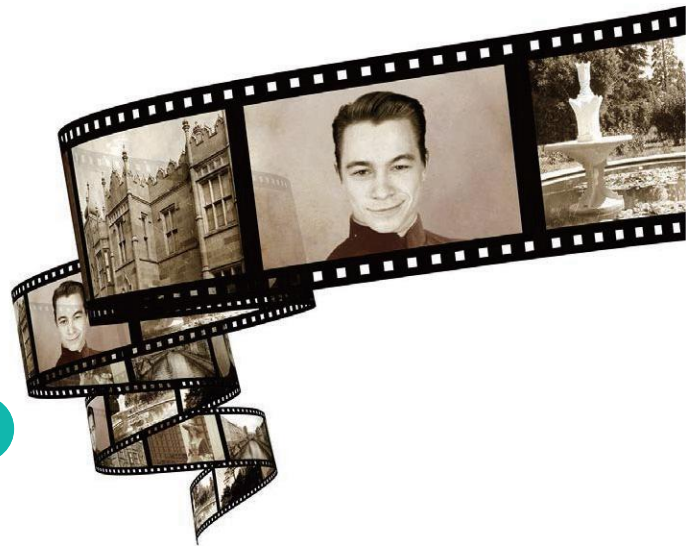


ちょっと ブレイク しませんか?

第 41^P回 「LIFE!」 (2013年 米国)



イソップに「人間世界のエロース」という寓話がある。

「ひとつ寓話を聞きなさい。ゼウスが創造した時の人間は、今の人間が備えているものはすべて持っていたが、エロースはまだ人間の魂の中に住みついていなかった。まだ翼をもった神として天上に住み、神々に恋の矢を射かけるばかりだった。ところがゼウスが、自分の被造物の中で一番美しいものが滅びるのを恐れて、エロースを人類の守護者として遣わしたのだ。エロースはゼウスの使命を帯びたものの、すべての魂の中に住みつくことを潔しとしなかった。エロースに縁なき穢れた性格のすべてを、等しなみに我が住処とするのが嫌だったのだ。そこで、有象無象の魂は、ニンフから生まれた「下々のエロース」たちに世話を任せ、自分は神的で天上的な人間の魂に宿ることにした。そしてそれに取り憑いて恋の狂気へと導き、人類のために数えきれぬ善きことを実現させたのである。性魯鈍*で愛へと動かされにくい人を見たら、かのエロースの賜物に値せぬと思うがよい。鋭く、心熱く、炎のように恋愛へと突き進む人を見たら、かのエロースの友と思いなさい」

今回紹介する作品は、「LIFE!」(2013年 米国)

世界的に有名な「LIFE」で写真管理をしている冴えない中年男ウォルターは同僚シェリルに片思い、専ら空想に耽っている。経営難で交代したボスは早速、オンライン化、休刊、リストラを開始。最終号の「LIFE」表紙は大写真家ショーンの作品と決まっていた。ショーンは全幅の信頼を置くウォルターにネガの25番の使用を指示し「LIFE」の社訓が刻印された財布も贈っていた。肝心のネガ25番がないので困り果てたウォルターは決心してシェリルに話しかけショーンの所在を探る。生まれて初めての大旅行でグリーンランドに着くが既にショーンの姿はない。跡を追いついアイスランドへ向かうが、タッチの差で会えない。NYに帰ると鹹を宣告され、既にリストラされていたシェリルを訪ねる。彼女の元夫が出迎えたので夫婦のよりが戻ったと早合点。帰宅したウォルターは失意と怒りで、ショーンから貰った財布をごみ箱に捨ててしまう。その後、ヒマラヤに登ると雪豹を撮影中のショーンによく会える。ネガの25番は財布の中だと知らされ、捨てたことを後悔し帰国。すると捨てた筈の財布を母が拾っていたのだ。お陰でウォルターはボスにネガを渡すことが出来た。解雇手当を貰う日にウォルターはシェリルと会う。市販された「LIFE」最終号の表紙は、なんとネガをチェックするウォルターの姿だった。その表紙を見ながら2人は互いに手を繋ぎ歩き出す。いつの間にかウォルターの空想癖は消え、返しの愛を得るといふ心温まるエンディング。「ナイト・ミュージアム」で奇才を発揮したベン・スティラーが監督・主演だ。

「LIFE」誌の休刊前の最期の号の表紙の写真を巡って絶景を追体験でき、中年男の純愛と空想癖を見事に描いているが、青少年も安心して見られる作品だった。ところで、LIFEには命、生物、人生の意味がある。ぼかぼか陽気の春は恋愛が芽生える。恋心に無頓着ではいけないとイソップは説いた。エロス、ロゴス、テロス、パトス、エトス等、古代ギリシャの智慧は今日も生きている。老いて元気がないとEDと診断されるし、古希を過ぎても益々盛んだと「エロ爺」と揶揄される。何事も年相応が良い。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長

(*魯鈍は差別用語なので現在は使われていないが、原作のまま引用した)
(前回40号では、=金持の前に「分限者」が抜けておりました)